

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 第9期生紹介

※五十音順

【学生】

名前：遠藤 なお（えんどう なお）

所属：福島県立医科大学 看護学部看護学科

出身地：山形県米沢市



東日本大震災を経験したことから、他の災害や発災当時の医療従事者の働き・重要性に興味をもち、医療従事者という責任のある職に災害医療や災害看護の面から携わりたいことを目標に勉学に励ん

できました。昨年からは、災害医療サークルや学生団体に所属して活動を行ってきました。

しかし、活動を重ねていくにつれ、自分の知識の少なさや薄さ、自分の意見や視野の狭さを痛感していくようになり、より自分を飛躍させたいと試行錯誤している中で教授から本プログラムを勧められたことが参加を決めたきっかけです。本プログラムを通して、内容はもちろんのこと、GWや他の参加者の意見などから様々なことを吸収し自分の糧にしていきつつ、災害が発生した時に自分の力がどの程度そして、どのように通用するのか客観的に見極めていきたいと考えています。日米間の、災害に対する異なる考えや対策について学び、成長を実感できる半年間にしていきたいです。

内定通知を受け取った時は、「災害看護をより探求できる」「自分はより飛躍できる」という嬉しい気持ちと希望で心が満ち溢れました。そして、自分の背中を押して、応援して下さった教授や家族、友人にすぐに内定を連絡しました。プログラム中は、自分を選出していただいたことに責任感を抱きながら、私にしか出せない味を提供して、10人の仲間と災害看護について探求していきたいと感じています。学生だからこそできる機会・経験です。私に与えていただいた貴重な機会を生かして、今まで得てきた知識や経験と結び付けながらプログラムに向き合っていきたいです。アラムナイから、「疑問はすべて解決していくことがよい」とアドバイスを頂いたので、積極的に質問したり、意見を述べたりしていきたいです。

名前：大泉 萌恵（おおいずみ もえ）

所属：兵庫県立大学 看護学部

出身地：兵庫県神戸市



プログラムを通して災害看護について学び、今後の活動・将来の看護に生かしたいと考え、応募しました。神戸で生まれ育ち、幼い頃から震災について学び、考え続けてきたことから災害への関心が昔からありました。大学でオーストラリア・マレーシアなどから看護学生を受け入れ、災害看護の研修を行うプログラムへ参加し、留学生と共に災害看護を学んだことから、災害看護へより興味を持つようになりました。将来災害看護に携わりたいという思いが高まると同時に、自国の災害医療に対する知識の無さを痛感し、もっと災害医療を学ぶ必要があると考えました。神戸だけでなく東北の震災など自国の災害看護を学べることに加え、アメリカの最先端の災害看護についても学ぶことができること。同じ志を持つ仲間と共に学ぶことで、様々な意見や学びを共有することができることに魅力を感じ参加しようと考えました。最大限吸収し、積極的に学び、活動していきます！

プログラムの内定通知を受け取った時は、「本当に自分が！？」という驚きと、大学2年次から参加したいと思っていたこのプログラムに参加することが叶った嬉しさから、すぐに友達や家族、応援して下さった先生に報告しました。本プログラムの10名の1人に選んでいただいたからには、志を持つメンバーと共にこの1年間全力で取り組み、責任を持って学んでいきたいと思っています。今年度も11月にオーストラリアから看護学生達が災害看護を学びに大学へ来ることが決定しています。昨年までと異なり自信を持って話し、意見交換ができるようになることを直近の目標として、成長していきたいと思っています。また、このプログラムで学んだことを今後の看護師のキャリアの中でも生かし、実際に災害現場で命を救い被災者を支えられる看護師になること。日本の災害看護分野を牽引するリーダーとなれるよう努力し続けます。

名前：小川 舞桜（おがわ まお）

所属：日本赤十字九州国際看護大学 看護学科

出身地：北海道岩見沢市



私は様々な国籍や文化、宗教を持つ方に対して、“あらゆる視点で苦痛を取り除きたい”という気持ちで看護を学んでいます。災害時は誰もがパニックに陥りますが、特に在留外国人はコミュニケーション・ギャップなどにより、災害弱者になりやすいといわれています。彼らが災害時に居住する地域で心身の健康を維持するために必要な医療支援や身を守るための情報獲得の手段などについて自身の考えを深めたいです。災害時に海外の方が安心して避難行動をし、その後の日常生活を送るためには、いまの日本にはどのような課題があるのか、国内外の研修を通じて学びたいと思い参加しました。目の前で、苦しい、つらい気持ちを抱えている方に寄り添うために、文化や言語が異なる方に対してどんなニーズが求められており、平時からどんな取り組みをすることが求められているのかを考える機会にしたいです。

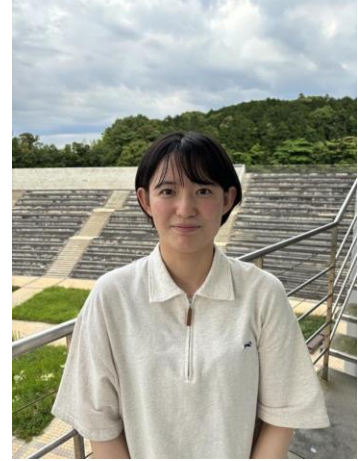
合格通知を受けた際は本当に驚き、嬉しい気持ちでいっぱいでした。そして、災害医療に興味のある全国の学生とつながれることが大変嬉しく、国内外の研修を通じて興味のある領域の勉強が思う存分できる環境に感謝をして半年学んでいきたいです。私は現在、災害看護の何に興味があって、これからどう勉強したいのか正直わかりません。そのため、私自身が今後どのようにして災害医療に携わりたいのか、またどのようにしてプログラムの学びを活かすことができるのかを考える機会にしたいです。実際に自分の目で見て感じ、何を思い、そこから何を考えて看護につなげ、その地域に住む方々の役に立つことができるのか、考えたいです。

また、このプログラムに参加するにあたり、支えてくださった大学の先生方や友達、家族にしっかりとここでの学びを伝え、大学内にとどまらず、この学びを糧にこれからも災害医療について学びを深めていきたいと思いました。

名前：高田 結（たかだ ゆい）

所属：日本赤十字九州国際看護大学 看護学科

出身地：長崎県南島原市



私は、中学生のときに東日本大震災の被災地を訪問したことをきっかけに災害看護に興味をもつようになりました。そのなかでも災害関連死を予防するための看護活動について興味があります。避難をして助かった命が避難所の環境が悪かったり、十分な看護を受けることができなかつたりして、健康状態の悪化や自殺につながるなどの災害関連死はあってはならないことだと考えます。助かるはずのいのちをなくさないためには、急性期からの介入が必要であると考え、先進国である海外では、災害急性期でどのような医療・看護ケアが施されているのかを学び、災害医療や看護を専門とする施設や団体を訪問し、専門的な知識を得たいと思い参加しました。本プログラムに参加させていただくことでしか学べないことや経験できないことが多くあると思うので、この貴重な機会でも多くの学びを吸収したいです。

プログラムの内定通知を受け取ったときは、本当に嬉しくて、信じられませんでした。参加を応援してくださった大学の先生方や家族、友人に早く伝えたい気持ちになりました。内定を伝えると、みんな喜んでくれて、本プログラムに参加できることを改めて実感することができたとともに、身が引き締まる思いになりました。また、アメリカに行って海外の災害医療について現地で学べるという、とても貴重な経験をさせていただけるということを光栄に思いました。選出していただいたからには、私がこれまで経験したことを他の学生に還元したり、他の学生の知識を受け取ったりしながら、お互いに高め合っていけるよう努めたいと思います。また、今まで大学内で学んできた知識を統合させて、災害看護に関する知識をさらに発展させていきたいと思っています。

名前：武田 梨夢（たけだ らむ）
所属：東北大学 医学部保健学科
出身地：宮城県大崎市



私は、将来助産師として、どんな状況下においても、「安心・安全なお産」を提供するとともに、妊産婦とその家族の悩みに寄り添うことで、女性の権利が守られる社会作りに貢献していきたいと考えています。8歳のときに、東日本大震災を被災し、その中で物資不足や避難所でプライバシーの守られていない生活を経験したことから、災害時は女性、特に妊産婦の権利が侵されやすい状況にあるということを実感しました。この経験を通して、私は母子に関する専門的な知識と技術をもつ助産師が、避難所の整備や妊産婦に対する心理的ケアを行うことで、災害時においても女性の権利が守られる支援を積極的に提供していくことが必要であると考えます。このことから、私は本プログラムへの参加を通して、半年間全力で災害看護と向き合うことで、トリアージやPFAなどの災害時の専門的技術を実践的に習得していくことに加え、「自信」と「主体性」も身につけていきたいです。

内定を頂いた際には、ずっと参加したかったプログラムだったので、本当に嬉しい気持ちでいっぱいでした。また、私の身近には災害看護を専門的に学ぶことができる機会がなかったことから、貴重な機会をいただけたことに感謝するとともに、6ヶ月間で災害看護に対する知識・技術を習得し、その学びを最大限に生かすことで将来助産師として災害看護を牽引していきたいという強い覚悟が芽生えました。実際に災害現場を訪問することで、日本の災害現場の現状と課題を自らの目で捉えて、これからの自分に何ができるのかを明確にしていきたいです。また、災害時においては、可視化されにくい問題も多いことから、広い視点をもって、問題を捉えていきたいです。選んでいただいたことに感謝するとともに、このプログラムでの学びを社会に還元できるように、全国から集まる災害看護に対する熱意をもつ看護学生の仲間と共に、半年間全力で取り組んでいきたいと思っています。

名前：真志保 天那（ましほ あまな）

所属：沖縄県立看護大学 看護学科

出身地：沖縄県浦添市



日本は災害大国であり、近年でも地震や大雨による災害など多くの災害が発生しています。また、近い将来、日本では大規模地震が発生することが予測されています。そこで私は災害看護を学ぶニーズが非常に高まっていると考えています。大学で災害看護の授業はありましたが、もっと深く学びたいと思いました。そして、以前からナースプラクティショナーや在日外国人の医療支援に興味があり、ナースプラクティショナーの導入が進んでいる米国の医療システムや海外の医療を見てみたいという思いもありました。このプログラム実際に被災地や米国に訪問して災害医療を学べること、様々な地域から集まる学生と意見交換が出来ることや共に学べることに魅力を感じて応募しました。このプログラムを通して、災害看護の専門的知識と技術を深く学びしっかりと身に付け、将来質の高い看護を提供できる看護職者になるための学びを得たいと思っています。

私は災害看護の授業をきっかけに災害看護に興味をもちました。また、高校生の時から海外の医療を学んでみたいと思っていたこともあり、このプログラムへ応募しました。このプログラムに参加をしたいと思った日から、教授や友達に沢山相談に乗ってもらったり、応援をしてもらいました。そのため、このプログラムの参加者として内定通知を頂いた時はとても嬉しかったです。教授や友達、家族に報告をすると一緒に喜んでくれて、沢山の応援の言葉も頂きました。被災地や米国に実際に訪問して災害医療を学べること、日本の様々な地域から集まった学生と意見交換をしたり共に学べることを楽しみにしています。積極的に行動や発言をして多くの知識や技術を得られるよう精一杯頑張ります。このような貴重な機会を与えてくださったことに感謝し、このプログラムで様々な経験を通して多くの学びを得たいと思います。

名前：松本 唯愛（まつもと ゆいな）

所属：東京医科歯科大学 保健衛生学科

出身地：東京都足立区



大学で災害看護だけを重点的に扱う授業はあまりないため、災害分野に特化した内容を在学中に、かつ国内外のフィールドワークを通して学べるという点に魅力を感じ応募いたしました。私が災害看護に関心を持ったきっかけは、高校1年次に参加した東日本大震災の被災地ボランティアで、被災された方に当時の状況を伺ったり、復興住宅で住民との交流を深めたりしたことです。参加する前、災害医療のイメージとして思い浮かべるのは、トリアージや現地での治療が中心でした。しかし、被災地の人々が複雑な心境を抱えながら暮らしを続けていることや、災害が子どもの成長に与える影響などに触れ、特に中長期の支援に興味を持つようになりました。私にとって、海外留学や他大生との交流はほとんど初めての経験となります。少し緊張する気持ちもありますが、この研修が今後災害の分野で活躍していくための実りある一歩となるよう、積極的に取り組んでいきたいです。

内定通知が期日より早く届いたので、内定を知った瞬間はポカンとした感じで、しばらく実感が湧きませんでした。研修に関するメールを何通かいただき、必要書類の準備などを進めていく中で、少しずつプログラム参加者の一員となったことを自覚し始めているところです。先日、オリエンテーションで初めての顔合わせを終え、十人十色のバックグラウンドも少しだけ知ることができました。個性あふれる方々と共に活動し、災害についての学びを深められることを非常に楽しみにしています。このプログラムの応募や参加に協力してくださった、またこれから協力してくださる方々に感謝しながら、たくさんの学びを得ることができるようメンバー全員で半年間頑張っていきたいです。

名前：安田 琳（やすだ りん）

所属：東京医科歯科大学 保健衛生学科

出身地：東京都福生市



私は高校 2 年生の時に経験した台風による避難体験と大学入学後の地域の災害支援に関するグループワークを通して、地域の看護・保健職における災害支援や対策に関心を持ちました。昨年の 12 月に 8 期生の方々の最終報告会を聞かせていただき、実践的な研修を行えること、米国での医療体制や災害看護について学ぶことに魅力を感じ、本プログラムに応募しました。本プログラム参加にあたって、実践的な研修や米国での医療を学ぶことで将来地域へ災害支援を届けるといった自身の目標に活かせるような知識や技術を修得したいです。また、様々な経歴や視点を持つ看護学生みんなと 1 つのプログラムを完遂できるように、自分はグループの中で何をすべきか常に考え主体的に参加したいです。

本プログラムに参加した先輩からお話を聞いたり、面接の対策を行ったりと、応募にあたって時間をかけて準備してきたため、内定通知を受け取った時はとても嬉しかったです。本当に嬉しくて、後日先生や先輩、友達や家族に報告しました。また、選ばれたからには、責任を持って本プログラムに参加しようという気持ちも同時に芽生えました。今まで海外で看護について勉強する経験も、災害看護について深く学び、体験する経験もなかったため、本プログラムでより多くの経験や知識を吸収したいと考えています。また、それらの経験を通して、周りに災害看護についての知識をどう共有していくかについても考えたいです。さらに協調性を持ちながら参加することで、それぞれの個性を持つ仲間たちと最高のプログラムだったと思えるように活動していきたいです。

名前：山崎 海衣夏（やまざき みいな）
所属：岡山大学 医学部保健学科看護学専攻
出身地：大阪府大阪市



プログラムへの参加理由は、大きく3つあります。災害看護について国際的な視点を持ち学びたい。日本とアメリカでの災害看護の実状や課題について自分自身の目で見て考え行動できる人物になりたい。これからの災害看護分野において次世代のリーダーになりたい。これらのこれら3つの柱を中心に、プログラムの「事前研修」

「渡米研修」「事後研修」に臨みたいと考えています。様々な学びの場においてグローバル化が進むにも関わらず、まだ日本国内においては看護分野に特化した国際的な学習や機会は少ないように感じています。一方で、このプログラムは全国の看護学生を対象に、官民共同で災害看護領域での貴重な学びの場を提供しており、日本とアメリカの災害を学べる最高の教育機会だと考えます。プログラムを通して、日米の災害を比較検討しながら、これからの災害に備えるためにできることは何かを見つけ主体的に行動していきたいです。

このプログラムの内定通知が届いた際は、「まさか私が?!」と信じられない気持ちと同時にこのプログラムへの準備と努力が実ったという嬉しい気持ちで、号泣してしまい喜びの感情が溢れていました。涙目ながら何度も内定の二文字を確認し、ご指導いただいた大学の先生、支えてくれた家族に報告しました。家族も先生も、自分事のように喜んでくださり感無量でした。実は、合格通知を頂くまで毎日近くの神社にお参りにいっており、その強い気持ちや想いも選考で届いたのかなと考えています。9期生の10名に選んで頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。選んで頂いたことに意味を見出し自分の強みを活かしながら、感謝と謙虚な気持ちを忘れず、時には疑問や壁にぶつかりながら、確実に人として未来の看護職として成長していきたいです。10名のメンバー、メンターの先生方、TOMODACHIの運営事務局の皆様とチーム一丸となって学びの探求を深めていきます。

名前：吉松 和（よしまつ みきた）

所属：関西医科大学 看護学部看護学科

出身地：滋賀県大津市



災害支援ボランティアとして能登の被災地で活動した際に強く印象に残ったことは、道路や家屋が壊れた状態でも仕事や学校に行っており、そこには確かに人々の生活があったことだった。私は看護を通してその人がその人らしく生活するための支援をしたい。そうした思いが強くなった。同時に、そうした支援を通じて自分の存在が周囲の人の安心に繋がるような看護師になりたいとも考えている。このような看護師になるためには、問題やニーズに対して様々な解決方法や支援を知っている必要がある。また能登に行ったことで、教室の外に出て実際に現地に行くことの重要性に気づいた。これから半年間、全国のメンバーと共に、国内のみならず世界の災害対策について直接学ぶことができる。本プログラムに参加することで、将来、所属するコミュニティの減災・防災に寄与し、自分の理想の看護師に近づけるよう注力したい。

内定通知を受け真っ先に感じたことは、これから大学や関西を代表して活動していくということの責任感だった。そして大学の中で率先して災害看護学について学んでいくことにより、将来、同じ志を持つ学生が後に続けるモデルケースになろうと決意した。プログラムに参加することにより多忙になることや、これまで海外研修に参加した経験がないことに対する不安もあるが、一方で、これからどんなメンバーと出会い、どんなことを学び、何を成し遂げられるのかということを楽しみにしている気持ちの方が強い。プログラムの終盤には、今年は日本で行われる世界災害看護学会への参加が予定されている。半年後にはその場にいると思うと、期待で胸が高鳴る。自分が選ばれた意味をしっかりと考え、自分にしかできない看護を追求していきたい。また、この機会に出会うメンバーとプログラム終了後も共に活動していく仲間となれるような素晴らしい関係を築いていきたい。

【メンター】

名前：山本 加奈子（やまもと かなこ）

所属：関西医科大学 看護学部

出身地：京都府舞鶴市



振り返ると、はじめて被災地と言われる場所に足を踏み入れたのは、2011年の4月末、東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻市と陸前高田市でした。その後、13年間、毎年どこかの被災地に足を運び、なんらかの支援活動をしており、災害支援をほぼOJTで学んできたのかと思います。様々な職種の人と関わり、様々な支援を経験する中で、災害支援とは？災害看護とは？いつも現場で考えています。それは、いまだに答えがでない問いであるように感じています。今は大学教員が本務で、その中で時間をやりくりして、災害支援をしています。時間がある限り、現地に足を運びたいと思っています。少し、みなさんより多く積んでいる経験が、今後の災害看護分野の発展につながれば、とても嬉しく思います。みなさんが、この先の道を切り開いていく際の、一助になればと思っています。

本プログラムの存在は、以前から知ってはいましたが、災害看護支援の経験も浅く、まだまだそのタイミングではないかと思っていました。能登半島地震の支援活動をしている中で、Johnson & Johnsonの本プログラムの関係者の方と、偶然つながる機会がありました。そこから、ご縁がどんどんつながっていき、メンターとして、参加する運びとなりました。すべての出会いは、必然であり、きっと、このタイミングだったんだろうな、と思っているところです。メンターとして、参加できることになった以上、本プログラムが有意義なものになるよう、学生さん自身の力で学びを深めていけるよう、黒子として、精一杯サポートしていきたいと思っています。なにより、近い将来、災害看護について、共に語り合えることを楽しみにしています。

名前：内田 彩香（うちだ あやか）

所属：産業医科大学大学院 大学院医学研究科

出身地：京都府京都市

災害は予期せず突然起こり、災害対応者は迅速かつ適切な対応が求められます。そのような対応を出来るようにするためには、災害に関する教育と想定外を想定内にするような訓練が重要だと思います。災害看護教育は、学生や看護職者が災害時に必要な知識、スキル、そして心構えを身につける手段の一つだと考えます。私は、この教育プログラムに関わることで、看護職者が災害時に被災者に寄り添った最善のケアを提供できるようになりたいと考えています。また、災害看護に関する最新の知識を共有することで、被災者の命を救うことや健やかな生活を支える役割を果たす看護師の育成に寄与することになると信じています。国内外の災害対応に携わる中で、災害看護とはそして看護職の役割は何なのかを日々探求し続けています。今回のプログラムを通じて、日本とアメリカの災害看護の概念の違いや日本としての災害看護の強みを明らかにし、グローバルに活動していきたいと思えます。



私は災害看護に興味を抱き日々探求している最中です。内定を頂いた際には未熟な立場でありながらも選出いただいた驚きと喜びの感情でいっぱいでした。本プログラムでメンターとして私自身の経験や知識を共有することで、次世代の看護職者や学生の成長に繋がり、羽ばたいていくことを今年度のプログラムが始まる前から楽しみにしています。

メンターとしての私の目標は、学生が自信を持ち、自己成長を促進し、将来専門家としてのグローバルなキャリアの実現に向けた支援を提供することです。私は受講生が目標を達成し、困難に直面しても自信を持って前進できるように、自分自身の能力や独自の道を見つけ、それを活かせるようサポートしたいと思います。このプログラムは受講生とメンターは相互に成長し、学び合うことができる素晴らしい機会だと思います。災害看護およびグローバルに活躍できる人材の教育プログラムに携われることに、心より感謝申し上げます。